

中学校 第1学年 E 球技 ア ゴール型「フットサル」
単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、ボール操作等について理解できるようにする。						
思考力、判断力、表現力等	攻防ができるようになる。						
学びに向かう力、人間性等	フットサルの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする。						

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2	3	4	5	6	7	評価規準	
ねらい	競技の特性やボール操作等について理解することともに、自己の課題を見つけている。							【知識・技能】 ①インサイドキック、ボールキープ、ドリブルの動きのポイントを言ったり書いたりしている。 ②インサイドキック、ボールキープ、ドリブルでボールをコントロールすることができる。	
導入	準備運動(ストレッチの紹介を兼ねる)	チーム全員が活躍するために、ルールを工夫し、空いた場所をめぐる攻防を楽しむことができる。							【思考・判断・表現】 ①仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。 ②自分や仲間が全力ゲームを楽しむための方法を考え、仲間に伝えている。
展開	ボール操作やプレイ中の動きの課題を見つけてるために、試しのゲームを行う。	共：(3)生徒同士が学び合いながら行う工夫 ・心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う。(ペアやチームでストレッチ、ボールを使ったのストレッチや補強運動等)							【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に積極的に取り組むようとしている。 ②マナーを守ったり相手の健康を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。
終末	今後の学習の見直しをもつことができるように、ボール操作やプレイ中の動きについての課題を話し合う。	共：(3)生徒同士が学び合いながら行う工夫 ・試合終了後、チーム全員が活躍するためにどのような工夫が必要か考える。 ・コート内の人数、コートのおおきさ、ゴールのおおきさ、パスの回数等 ・考えた工夫を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認する。							
	練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 行い方：1チーム3名、ハーフコート 共：(2)チームの技能に合わせたルールの工夫 ・生徒が練習の成果を実感できるように、ゴールのおおきさ、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 ゴールのおおきさ⇒A：コーン2つ分、B：コーン3つ分、C：コーン4つ分 相手の人数⇒A：1人、B：2人、C：3人								
	チームの構成：1チーム5～6名(6チーム) コートのおおきさ：3チームで1コート使用(A対Bのゲーム中、Cが動画を撮影する時間とする。) 行い方：1チーム5～4名、5分間、通常のコート ゲーム1：A対B、A対C、B対C (各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。)								
	振り返り(授業後アンケート)の記入								

知識・技能	①	①	②	②	②	②	②
思考・判断・表現			①	①	①②	②	②
主体的に学習に取り組む態度							

個人やチームの課題解決に適した活動やルールの工夫

中学校第1学年 E 球技 ア ゴール型「フットサル」

1 単元の目標

- 競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前の空間をめぐる攻防ができるようにする。 【知識及び技能】
- 攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- フットサルの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする事、健康・安全に気を配ることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫

フットサルの授業で基本となる技能として、ボールコントロールがあげられる。パス、ボールキープ、ドリブルなどの基本的な技術が不十分な場合、チームに迷惑をかけてしまうという理由からボールをできるだけ触らず、コートにただ立っているだけになってしまう生徒が出てしまい、結果的に勝敗に影響を与えてしまう場合がある。これを解消し、性差や技能差を補い、全員がボールに積極的に触ろうとする意欲を引き出すために、生徒が自らの技能に合わせて提示された練習から選択できるようにした【資料1】。



【資料1 選択した練習に取り組む様子】

(2) チームの技能に合わせたルールの工夫

チームの技能に合わせたルールの工夫として、ゴールの大きさを選択できるようにした。大きさはコーン2つ分、3つ分、4つ分を選択させることとした【資料2】。また、ハーフコートでのミニゲーム(1チーム3名)を行う際、ディフェンスの人数を1人～3人の中から選択できるようにした。さらに、オールコートでのゲーム(1チーム5～6名)を行う際、1人の生徒がドリブルで持ち込み、シュートするなど、他の生徒がボールを触れないようなことが起こらないために、パスの最低回数も設定させ、より多くの生徒がゲームの中でボールを触る機会を増やすようにした。



【資料2 ゴールの大きさを選択している様子】

(3) 生徒同士が学び合いながら行う工夫

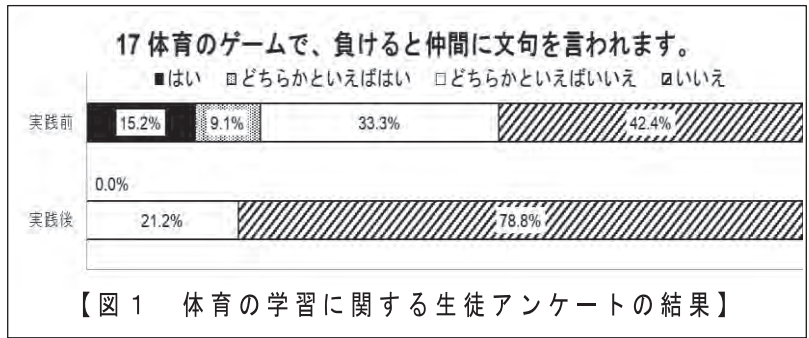
チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行うことができるように、ゴール型に必要な動きを説明した後、チームオリジナルのアップメニューを考える場面を設定した。メニューを考える視点としては、「楽しいこと」「平等に行うことができること」「心と体が温まること」「フットサルの基本技能に繋がる動きであること」とした。また、ゲーム中、生徒が自分たちのチームの動きを客観的に捉えることができるように、ゲームを行っていないチームの生徒がタブレットで動画を撮影することとした。その動画をチームで確認し、自分や仲間が活躍できたかどうかを確認し、どのような工夫をすれば自分や仲間がさらに活躍できるかを話し合えるようにした。話し合う視点としては、「楽しさ」「ボールを触る回

数」「パスの回数」「ボールを持たないときの空間へ走り込む動き」である。この視点に沿ってチーム内の話し合いを行い、ゲームを重ねることでチームの連携が高まっていくことを目指した。

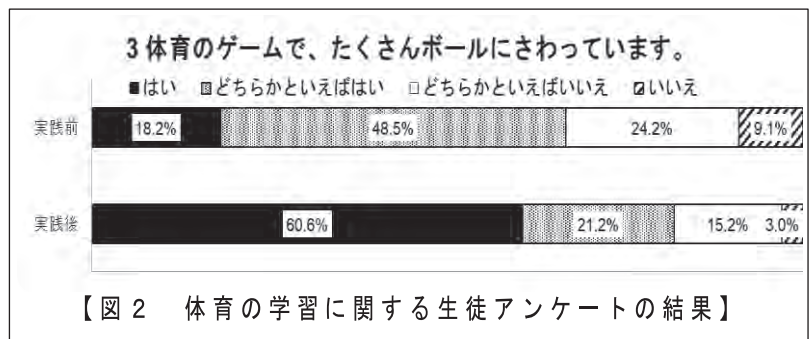
3 成果と課題

(1) 成果

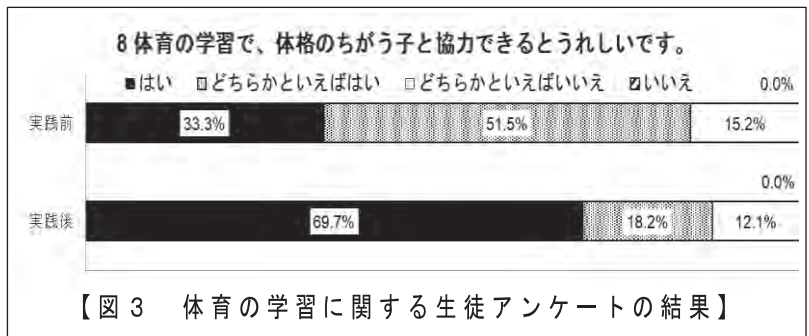
- 単元前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート（21項目質問紙アンケート）」において、「体育のゲームで、負けると仲間に文句を言われます」に対し、「いいえ」と回答した生徒が増加した。また、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒はいなくなった【図1】。これは、チームの課題解決をするために、動画を基に話し合う活動を設定したことで、ボールを持たないときのポジショニングや動きだしのタイミングなどを仲間と確認し、そのチームにあった攻め方を合意形成して、選択できた結果だと考える。



- 「体育のゲームで、たくさんボールにさわっています」の項目では、「はい」と回答した生徒が増加した【図2】。これは、個人やチームの技能に合わせて練習内容やゴールの大きさ、ディフェンスの人数を選択できるようにしたことで、単元を通して技能差にかかわらずボールに積極的に触ろうと意欲的に学習に取り組むことができた結果だと考える。



- 「体育の学習で、体格の違う子と協力できるとうれしいです」の項目では、「はい」と回答した生徒が増加した【図3】。これは、単元を通して男女差、技能差にかかわらず生徒同士が学び合う学習が展開できた結果だと考える。

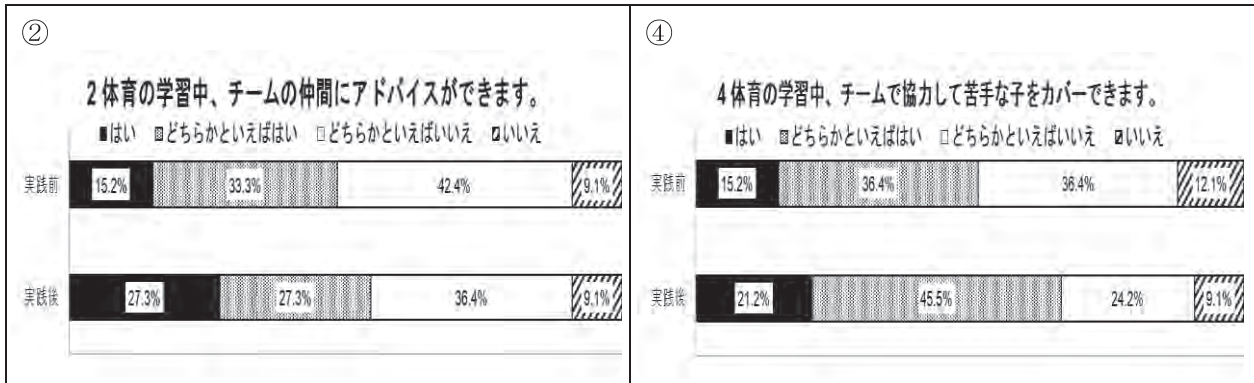


(2) 課題

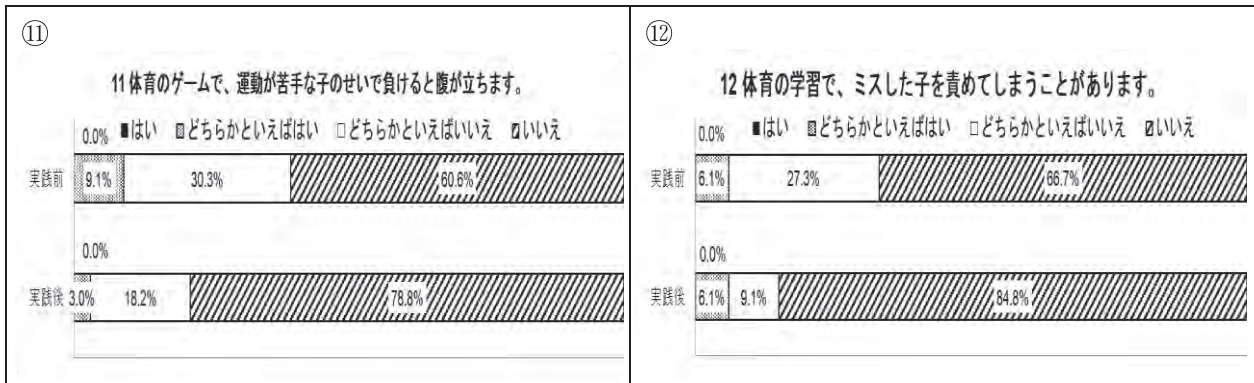
- 昨年度行ったバレーボールと比べて、体力差や技能差を「ルール工夫」で補うことが非常に難しいと感じた。ゴール型でしかも足を使う競技のため体力差や技能差が顕著に表れることが理由である。個人の技能を高めつつ、用具やコート、ルールを工夫しながら、得意な生徒も苦手な生徒も楽しめることができるよう、今後も研究を重ねていくことが必要であると感じた。

【児童生徒の変容】

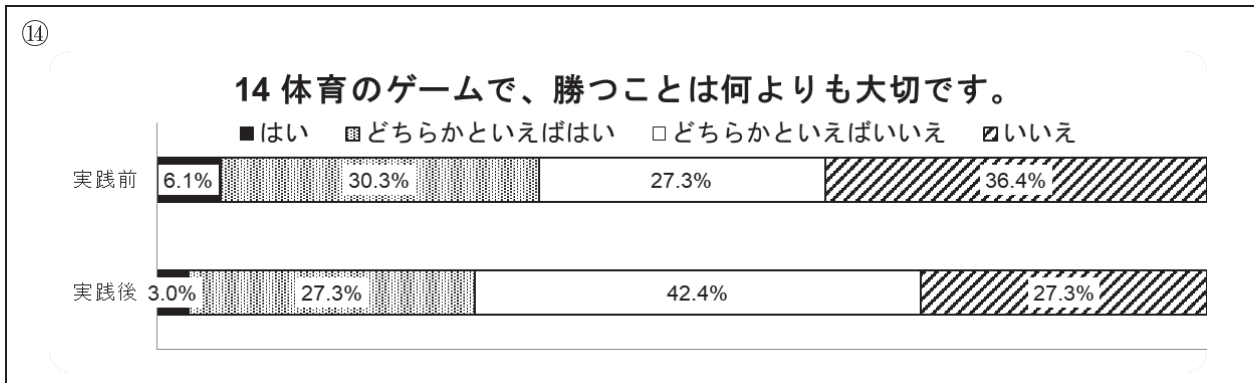
〔 I リーダーシップ 〕



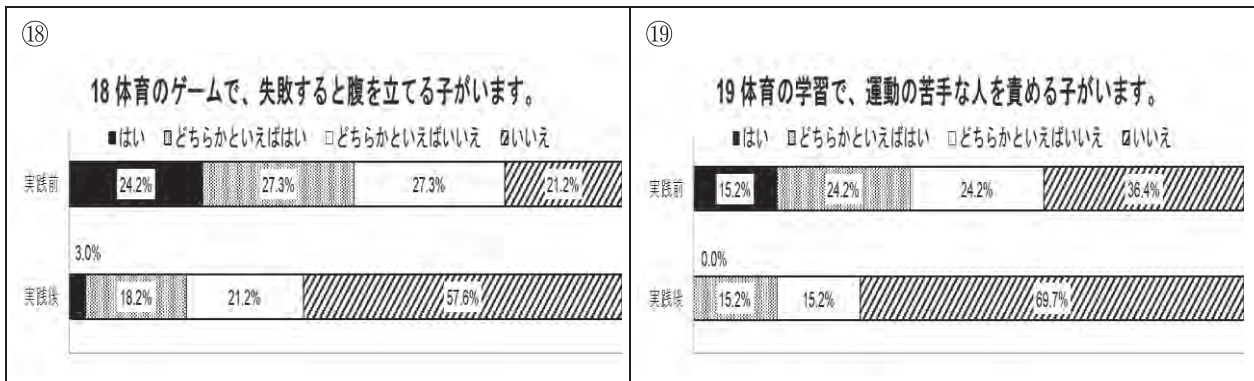
〔 IV 失敗への排斥 〕



〔 V 過度な勝利志向 〕



〔 排除雰囲気 〕



中学校第1学年 E 球技 イ ネット型「バレーボール」

単元目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻るなどの動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようになる。						
思考力、判断力、表現力等	攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。						
学びに向かう力、人間性等	バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたブレイなどを認めようとする、健康・安全に気を配ることができるようにする。						

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2	3	4	5	6	7
ねらい	競技の特性やボール操作等について理解するとともに、自己の課題をみつづけることができる。						
導入	準備運動(ストレッチの紹介を兼ねる)						
展開	<p>競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解することができよう、映像等を使って説明する。</p> <p>ボール操作やブレイ中の動きの課題を見つけて、試しのゲームを行う。</p> <p>1 チーム 3～4 名 (男女混合) とする。</p>	<p>基本的なボール操作(オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーサーブ)を身に付け、簡単なゲームを楽しむことができる。</p> <p>共：心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う。(ペアやチームでストレッチ、ボールを使ってのストレッチや補強運動等)</p> <p>動きのポイントを提示し、オーバーハンドパス・アンダーハンドパス)の練習を行う。</p> <p>共：(1)個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫 ・生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、バウンドの回数(ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内)を生徒が選択できるようにする 共：(3)生徒同士が学び合いながら行う工夫 ・生徒が仲間と関わり合いながら繰り返しボール操作に挑戦できるように、2人組で行う練習方法、4人(チーム)で行う練習方法を提示する。</p> <p>練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。</p> <p>行い方：1 チーム 3～4 名、5 分間、通常のコート 共：(2)チームの技能に合わせてバウンドの回数(個人)、コンタクトの回数(チーム)を制限したゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 バウンドの回数⇒A：ノーバウンド、B：ワンバウンド以内、C：ツーバウンド以内 コンタクトの回数⇒A：3 回以内、B：4 回以内、C：5 回以内</p>					
終末	今後の学習の見通しをもつことができるように、ボール操作やブレイ中の動きについての課題を話し合う。						
振り返り(授業後アンケート)の記入	振り返り(授業後アンケート)の記入						

知識・技能	①	①	②	②	②	②	②
思考・判断・表現					①②		②
主体	①						

評価規準	<p>【知識・技能】</p> <p>①オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの動きのポイントを言ったり書いたりしている。</p> <p>②パスとレシーブでボールをコントロールすることができる。</p>
【思考・判断・表現】	<p>①仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。</p> <p>②自分や仲間が全力でゲームを楽しむための方法を分け、仲間に伝えている。</p>
【主体的に学習に取り組む態度】	<p>①学習に積極的に取り組むようとしている。</p> <p>②マナーを守ったり相手の健康を認めたりして、フェアなブレイを守ろうとしている。</p>

個人やチームの課題解決に適した活動やルールの工夫

中学校第1学年 E 球技 イ ネット型「バレーボール」

1 単元の目標

○競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻る動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようにする。

【知識及び技能】

○攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。

【思考力、判断力、表現力等】

○バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする、健康・安全に気を配ることができるようにする。

【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫

本実践の基本となる技能として、パスを行う際のボールコントロールがあげられる。この基本的な技術が不十分な場合、チームに迷惑をかけてしまうという理由からボールをできるだけ触らず、コートにただ立っているだけになってしまう生徒が出てしまう。これを解消し、男女差や技能差を補うことができ、ボールに積極的に触ろうとする意欲を引き出すために、生徒が自らの技能に合わせてバウンド回数（ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内）を選択できるようにした。その際、バレーボールの動きの特性として、ボールの落下点に動くことが求められるため、最初はノーバウンドから挑戦させ、それが難しい状況の場合はバウンドしたボールを操作できるようにした。

(2) チームの技能に合わせたルールの工夫

チームの技能に合わせたルールの工夫として、コンタクト回数を選択できるようにした。回数は3回以内、4回以内、5回以内を選択させることとした。また、パスゲームを行う際、1人の生徒が1回で相手コートへ返球し他の生徒がボールを触れないようなことが起こらないために、コンタクトの最低回数も設定させ、より多くの生徒がゲームの中でボールを触る機会を増やすようにした。

(3) 生徒同士が学び合いながら行う工夫

生徒がボール操作に挑戦する場面では、仲間と関わり合いながら活動できるように、2人組や4人組でできる練習方法を提示した。また、生徒が自分たちのチームの動きを客観的に捉えることがで

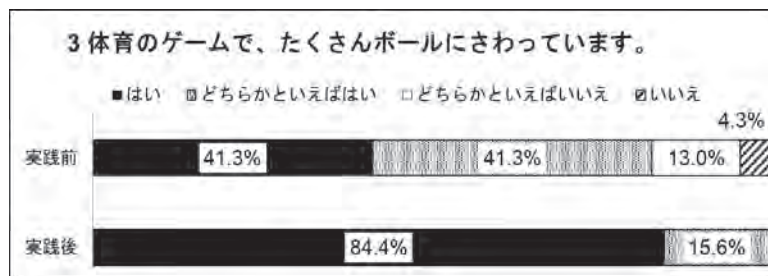


きるように、ゲームを行っていないチームの生徒にタブレットで動画を撮影させた。その動画をチームで確認し、自分や仲間が活躍できたかどうかを確かめさせ、どのような工夫をすればより自分や仲間が活躍できるかを話し合わせた。話し合う視点としては、楽しさ、1人1人がボールを触る回数、ラリーを続けられた回数、ボールを持たないときのカバーの動きである。この視点に沿ってチーム内の話し合いを行わせ、ゲームを重ねるごとにチームの連携が高まっていくことを目指した。

3 成果と課題

(1) 成果

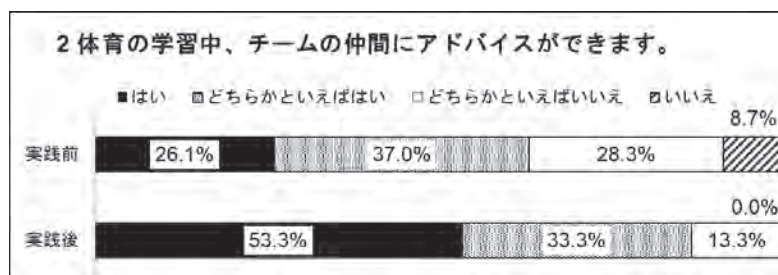
- 単元前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート(21項目質問紙アンケート)」において、たくさんボールにさわっていると回答した生徒が大幅に増加したことから、個人



人やチームの技能に合わせてバウンド回数やコンタクト回数を選択できるようにしたことで、単元を通して技能差に関わらず意欲的に学習に取り組むことができた。

- チームの課題解決をする上でゲーム中の動画を撮影し、その動画を基に話し合う活動を設定したことで、自分たちの動きを客観的に見ることができ、ボールを持たないときのポジショニングや動きだしを速くするための基本の構えができるようになった。その結果、今まで失点していたボールを繋ぐことができるようになり、ラリーが続く楽しさを味わうことができた。

- 単元前後アンケートにおいて、仲間にアドバイスができると回答した生徒が大幅に増加したことから、ゲームを行う際に、チームの技能に合わせルールを工夫したこと、練習の際



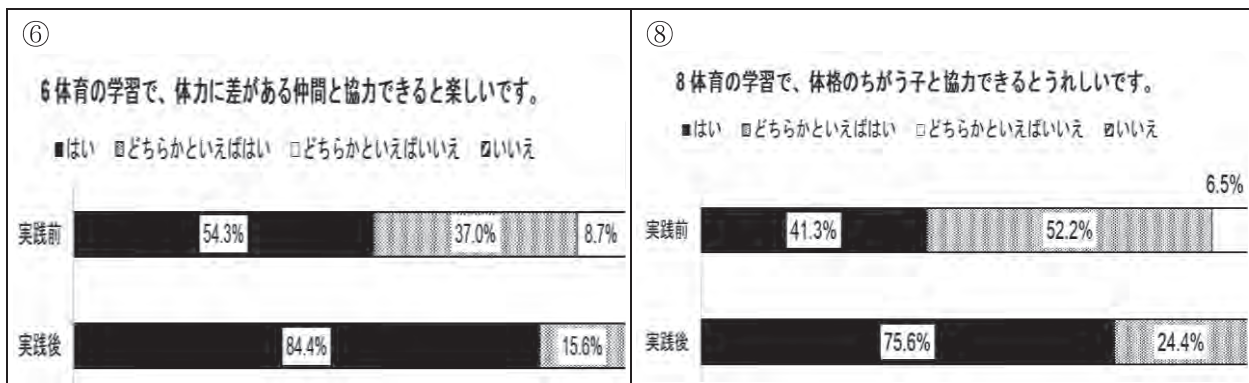
に、2人組、4人組と、仲間と関わり合う活動を設定したことにより、単元を通して男女差、技能差に関わらず生徒同士が学び合う学習が展開できたと考える。

(2) 課題

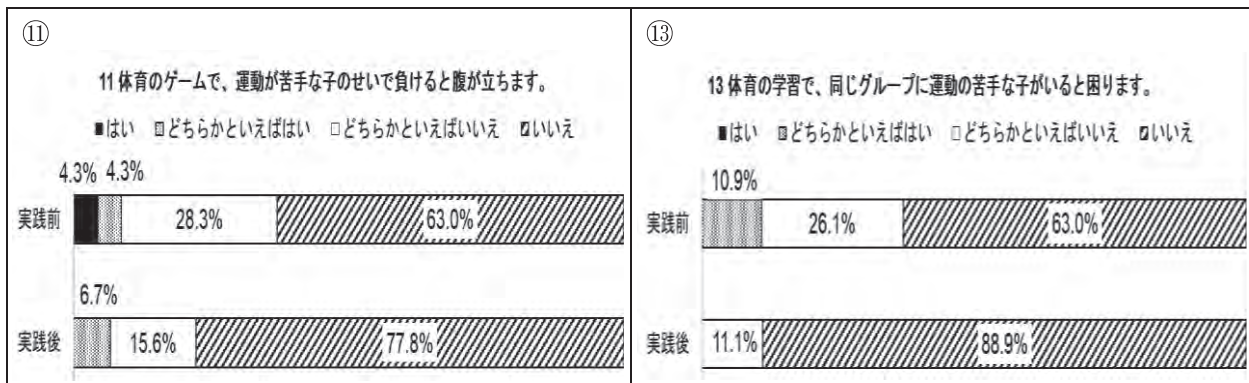
- 今回、生徒のパス技能を補うためにバウンドしたボールを操作できるようにした。しかし、バウンドしたボールを操作した生徒は、バレーボールの1つの特性であるボールの落下点に入る動きを身につけさせることが不十分であった。そこで、重さや落下速度が異なり、操作のしやすいボールを選択することができるようにするなど、用具を工夫することでバレーボール本来の特性を失うことなく操作の不安を軽減できるための工夫が今後必要である。

【児童生徒の変容】

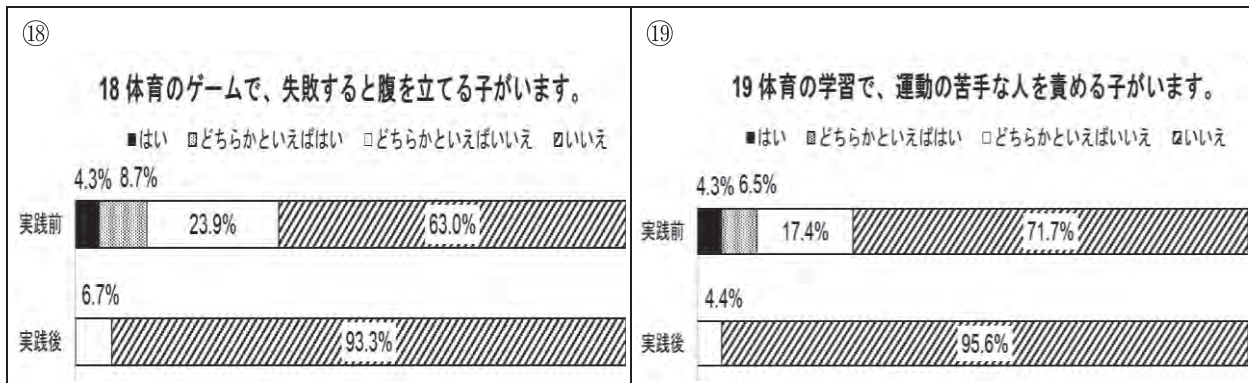
〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔Ⅳ 失敗への排斥〕



〔排除雰囲気〕



【授業実践協力者の声】

学級全体に、お互いを認め合うという態度の変化が見られるようになりました。実践を通して、自分自身が新しい視点で授業づくりを意識するようになり、今も試行錯誤を繰り返して、授業改善に努めています。



中学校第1学年 B 器械運動 ア マット運動
単元の目標

知識及び技能	技ができる楽しさや喜びを味わい、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技を滑らかに行うことができるようにする。またグループでお互いの構いを理解し、それを生かし合ってシンクロマットを作成することができるようにする。										
思考力、判断力、表現力等	一つ一つの技やシンクロマットの構成などの自己や他者の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。										
学びに向かう力、人間性等	マット運動の学習に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする、安全に気を配ることができるようにする。										

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	評価規準
ねらい	競技の特性や基本技術等について理解するとともに、自己の課題を見つけてあげることができる。	基本的な技のポイントを理解し、グループで協力しながら練習し、技を身につけることができる。											
導入	オリエンテーションを行い、競技特性や行い方、基本的な技術について理解することができるよう ICT 機器等を使って説明する。また、シンクロマットについて説明し、単元の目標を確認する。	共：心と体をほぐし、体温を高め、ケガ予防や柔軟体操、補強運動などのウォーミングアップを行う。 ○グループ構成 共：技能レベルが均等な男女混合の6人で構成する。リーダーを決定する。また、リーダーは技能レベルや性差を不問とする。 ○演技の作成の手順 (1)隊形を決める (2)取り入れる技を決める ・お互いの技能レベルを理解し、それに応じて技を選択する。 (3)場面毎に練習する。 ・練習をしていく中で出た個人やグループの課題を解決していく。お互いに意見を伝えたり教え合ったりしながら、ICT 機器やポイント表を活用する。 (4)演技の通し練習をする。 ・シンクロマットの演技をグループ相互に撮影してそれを視聴し、題を出し合って練習する。 ○演技の通し練習を行うグループと技の練習や構成の再考をするグループにわかれ、それぞれで課題解決学習を行う。 共：(2)男女共習において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできるグループ活動 ・お互いに意見を伝えたり、補助し合ったり励まし合ったりして練習する。											
展開	単元で帯活動として行うウォーミングアップの方法を知り、実際に行う。	共：技術にお互いに教え合っ練習する。ICT 機器やポイント表を活用する。											
終末	現時点における自己の技能レベルを知り、またグループが均等なグループを組むため、基本的技能についてレディネステストを行う。	共：(3)子ども同士・授業者と子どもとの学び合い、関わり合いの効果を ・グループ相互に演技を撮影し、動画を視聴して課題を指摘し合う。 ○発表会・スキルテストを行う。 ・お互いの演技を見合い、評価する。 ○グループの演技を視聴し、単元全体をふり返る場を設定する。 共：(3)子ども同士・授業者と子どもとの学び合い、関わり合いの効果を ・お互いに演技を見て感じたことを伝え合う。 ○個人の技能の伸びを確認し、単元全体をふり返る場を設定する。 ・技能レベルの伸び ・グループの仲間への関わり方											
													【知識・技能】 ①合理的な動き方のポイントについて言ったり、書いたりにしている。 ②基本的な技を滑らかに行うことができる。 ③違いを生かしシンクロマットを行うことができる。
													【思考・判断・表現】 ①一つ一つの技やシンクロマットの構成などの自己や他者の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫している。 ②それぞれの技能レベルに応じて、自分や仲間ができるようになる方法を見つけ、それを仲間に伝えている。
													【主体的に学習に取り組む態度】 ①マット運動の学習に積極的に取り組み、一人一人の違いを認め、それに応じて協力したり助けを求めようとしていたりしている。

振り返り (授業後アンケート) の記入 (個人及びグループ)

知識・技能	①												②
思考・判断・表現	①									①			②
主体	①									②			③

互いの違いを認め合いながらつくりあげるシンクロマット

中学校第1学年 B 器械運動 A マット運動

1 単元目標

- 技ができる楽しさや喜びを味わい、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技を滑らかに行うことができるようにする。またグループでお互いの違いを理解し、それを生かし合ってシンクロマットを作成することができるようにする。
【知識及び技能】
- 一つ一つの技やシンクロマットの構成などの自己や他者の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
【思考力、判断力、表現力等】
- マット運動の学習に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする、健康・安全に気を配ることができるようにする。
【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 互いの違いを認めながら運動の楽しさを味わう教材化の工夫

シンクロマット：グループの仲間と共に、お互いに補助をしたり励まし合ったりしながら連帯感を高め、協力しながら一つひとつの技や演技ができるようになることで達成感を高め、マット運動の楽しさを味わうことができるために、シンクロマットを行う。シンクロマットとは、グループで、個々の技や動きを組み合わせ、様々な隊形やタイミングを工夫して、動きの緩急や強弱を付けたりして表現するマット運動の演技のことである。また、技能レベルや性の違いを超えて取り組むことができるというよきももつ。

(2) 男女共習において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできるグループ活動

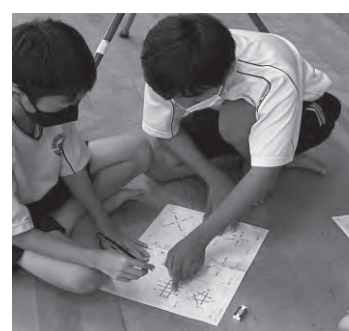
グルーピング：体力や体格に差があっても協力して取り組むために、全グループの技能レベルと男女の割合が均等になるようなグルーピングを行った。その際、技能や性差等は関係なくリーダー（1人）決めるようにした。

単元の冒頭に、基本的な技によるレディネステストを行った。その結果をもとに、グルーピングの構成ポイントとして、①自己に適した技を選択すること、②自己に適した技に応じて動きの緩急や強弱をつけて演技を構成することという二つのことを提示した。その結果、マット運動が苦手な生徒も意欲的に参加でき、また課題解決の練習ではできない技に挑戦することができた。また、グループ内の技能の高い生徒が補助をしたり賞賛したりしていた。

動きの緩急や強弱を構想している際には、どのような技を選択すれば次の場面に滑らかに繋がっていくか、全員が滑らかに技を行うことができるかについて思考を促した。その結果、技能レベルや性差に関わらず、お互いに意見を伝えながらシンクロマットを構成することができた【資料2】。特に、技能レベルが低くマット運動が苦手な生徒も、自分の意見を積極的に伝えてグループにアイデアを与えたり、場面毎の練習をする際には「せーの」というかけ声を積極的に発声したりすることができていたことが印象的である。さらに、シンクロマットで使用する音楽を選択する際も同じように話し合い、自分たちの好きな曲でシンクロマットの表現に合った音楽を選択することができた。



【資料1 技毎にグループで練習する様子】



【資料2 意見を伝えながら演技を構成する様子】

(3) 子ども同士・授業者と子どもの学び合い、関わり合いの効果

子ども同士では、単元を通して技能レベルの高い生徒が、技能レベルの低い生徒や苦手な生徒に対して、男女関係なく積極的に教えたり励ましたりして関わる姿が多く見られた【資料3】。また、技能レベルが低い生徒も、シンクロマットにおける演技構成の際に、隊形やタイミングについて自分の意見を積極的に発言したり自分ができる技を一生懸命に練習したりして、グループのために少しでも貢献しようとする姿が見られた。一つ一つの技のポイントをはじめ、シンクロマットにおける隊形やタイミングなどについてアドバイスをし合ったり、失敗したら励まし合ったり成功したら賞賛し合ったりして練習することができた。その結果、一人ひとりが基本的な技の技能レベルを向上させることができ、かつグループで立派なシンクロマットを完成させることができた。授業者と子どもの間では、基本的な技の習得段階においてはグループを巡回してポイントを押えたりどのようにすれば技をうまく行うことができるか発問をしたりして思考を促した。また、シンクロマットの演技を構成する段階においては、各グループを巡回し、授業者が質問をし、場面毎の繋がりや隊形の工夫などについてお互いに意見交換をしながら進めることができた。

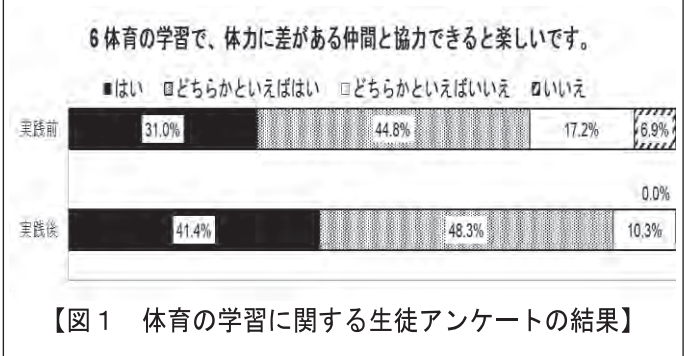


【資料3 互いに自分の考えを伝えている様子】

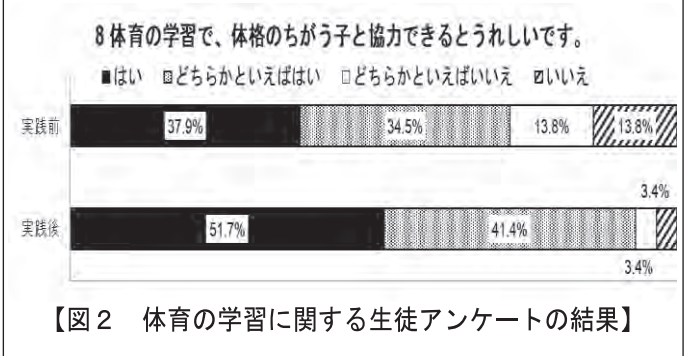
3 成果と課題

(1) 成果

○ 「体育の学習に関するアンケート」において、「体育の学習で、体力に差がある仲間と協力できると楽しいです」という項目で、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図1】。「体育の学習で体格のちがう子と協力できるとうれしいです」という項目では、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図2】。「体育の学習で、ミスした子を責めてしまうことがあります」という項目では、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と回答した生徒が増加した【図3】。これらは、教材化の工夫やグループ活動を位置付けて学習を進めたことが有効に働いたからだと考える。



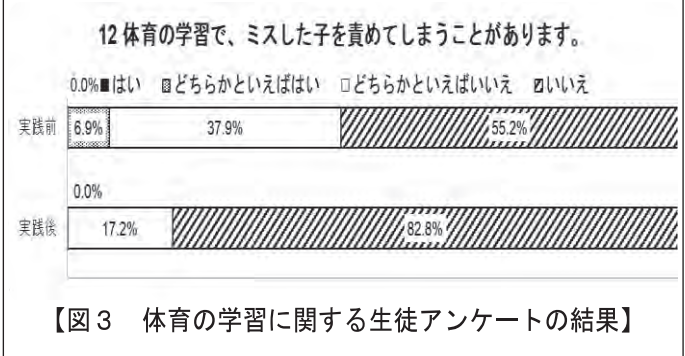
【図1 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】



【図2 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

(2) 課題

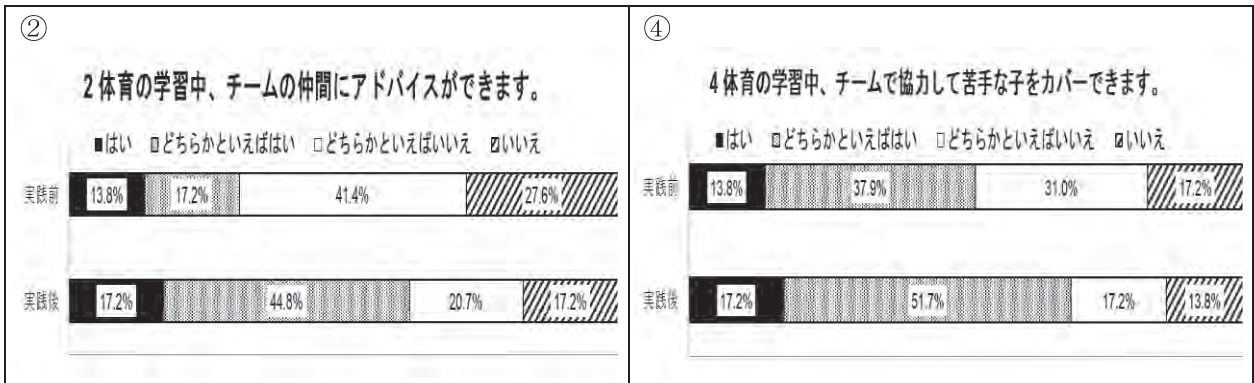
● 生徒が運動課題を解決するために、ICT機器やポイント表を活用してお互いに教え合って練習するだけでなく、各自に応じた支援が必要である。子ども一人ひとりや同じ課題をもった生徒などあらゆるニーズに応じた支援計画を立てて練習を行い、子どもに自らの運動課題を明確にさせることで、一人ひとりの違いを認め合いながら技能を向上することができる生徒を育てられると考える。



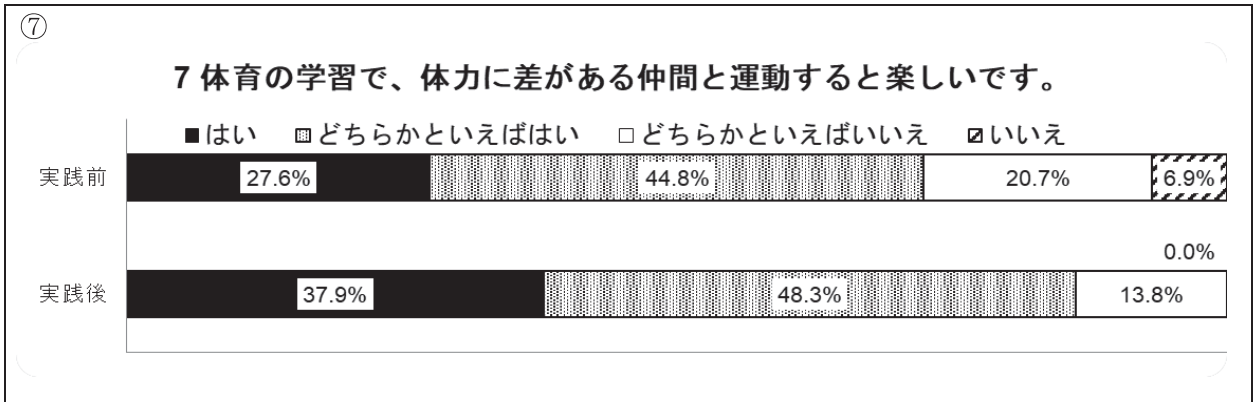
【図3 体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

【児童生徒の変容】

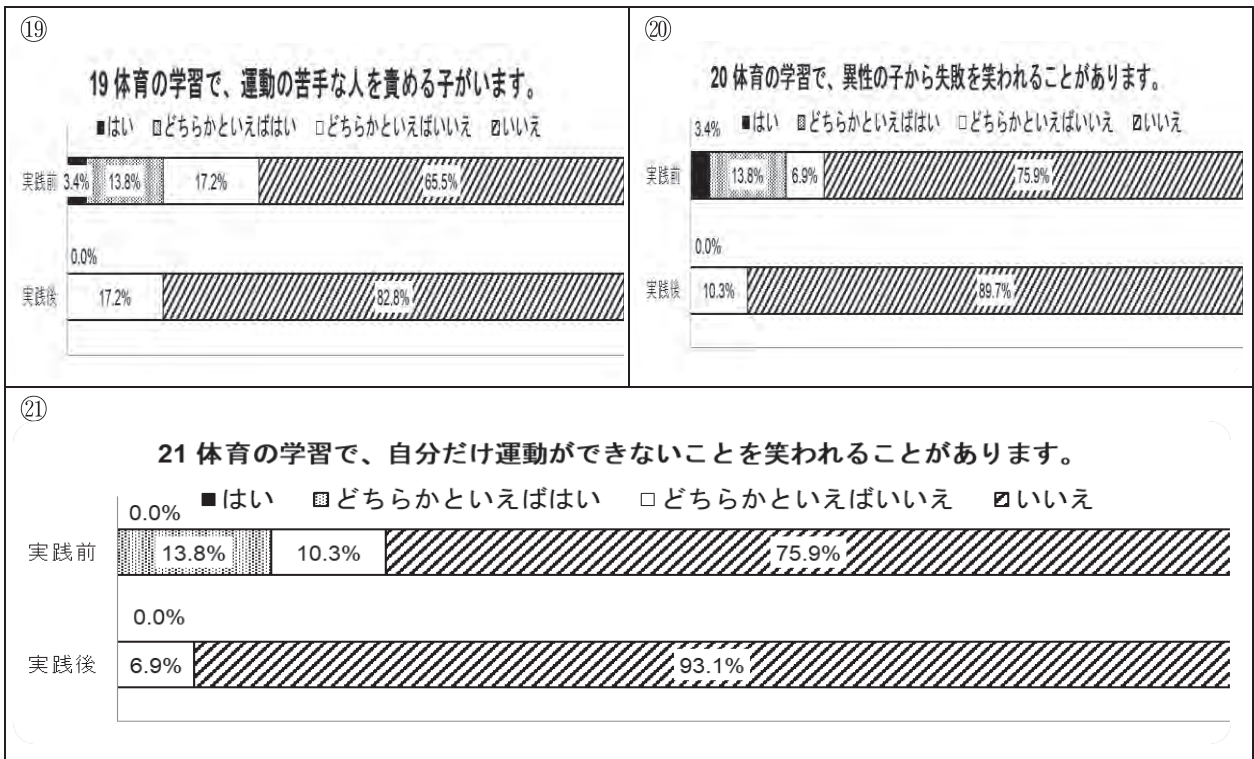
〔Ⅰ リーダーシップ〕



〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔排除雰囲気〕



【授業実践協力者の声】

運動が得意な生徒が、苦手な生徒と一緒に運動をすることを楽しんでいる姿が多く見られてよかったです。学級の男女の仲が深まったように感じています。



中学校第3学年 B 器械運動 工 跳び箱運動
単元目標

知識及び技能	体力の高め方や運動の観察方法を理解するとともに基本的な技を滑らかに安定して行い、発展技を行うことができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	技などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	自主的に取り組むとともに、互いに助け・教え合おうとすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしていくことができるようにする。

※共：単元全時間を男女共習で実施

ねらい	① 競技の特性や技の名称について理解するとともに自己の課題を見つけていくことができる。	② ③ ④ 基本的な技（開脚跳び、抱え込み跳び、台上前転）を身に付けるために、ポイントカードを活用し個人の技能を高めることができる。	⑤ ⑥ ⑦ 課題解決のために、ICT機器を活用したアドバイス活動を行うことを通して、条件を変えたり、技の完成度を高めたりすることができる。	⑧ 一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしていくことができる。
導入	準備運動（ストレッチの紹介）	グループ別に技に必要な準備運動や補強運動を行う。（体づくり運動の学習を活用する）	基本的な技・発展的な技（頭跳ね起き跳び、前方倒立回転跳び等）の復習をグループで行う。	発表会を行う グループで相互評価を行う。
展開	自己の課題を把握するた めに、基本的な技の試し 跳びを行う。その際、ペ アを作りチェクシオン を活用して互いの試技を 評価させる。	【個人メインの活動】 動きのポイントを提示し、基本的な技（開脚跳び、抱え込み跳び、台上前転）を行う。 習熟度別学習 共：（3）課題解決の工夫 ・生徒が自分の技能に合わせて練習ができるように、習熟度別のコースを設定し、自己にあった練習ができるようにする。 技別学習 共：（3）課題解決の工夫 ・技別にコースを設定しポイントカードを活用して互いの技を観察・評価し改善点をアドバイスできるようにする。	発表会に向けて発表する技を決め、発表順（構成）を話し合う。 共：一人一人の体格、能力などの違いに応じた発表の技を決定できるようにする。そのために、技の難度と出来栄え両方を評価し、苦手な生徒も自分にあった技を選ぶことができるようにする。 グループで課題解決に向けて練習を行う。 共：（1）グループの工夫 ・ICT機器を活用し、動画を撮影し模範演技と比較・考察させアドバイスを行うことにより、習得や完成度を高めることができるようにする。	発表会で行う グループで相互評価を行う。 共：（2）評価方法の工夫 ・競技会での採点方法を取り入れ、技の難度を比べ、技の難易度を出し、発表会での発表を評価し、一人ひとりに応じた課題をできるようにする。
終末	今後の学習の見通しを持つことができよう、発表会の評価方法について説明し、出来栄えも評価していくことを説明する。	【グループメインの活動】 グループに戻り、個別で学習した技のポイントを共有し、練習する。 共：（1）グループの工夫 ・実施していない技のポイントも理解できるようにする	整理運動、振り返り（授業後のアンケート等）の記入	

知識・技能	①	②	③	④
思考・判断・表現	①	②	③	④
主体	①	②	③	④

評価規準	【知識・技能】 ①基本的な技を身に付け、条件を変えて行ったり、技の完成度を高めたりして行うことができる。 ②体力の高め方や運動観察の方法を言ったり書いたりしている。 【思考・判断・表現】 ①技に必要な準備運動や事故が取り組む補助運動を選んでいる。 ②ICT機器等を活用し、自己や仲間の技の課題を発見している。 【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に自主的に参加しようとしている。 ②互いに助け合い、教え合おうとしている。 ③一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとしている。
------	--

男女混合グループによる評価方法・課題解決の工夫

中学校第3学年 B 器械運動 エ 跳び箱運動

1 単元の目標

- 運動の観察方法を理解するとともに基本的な技を滑らかに安定して行い、発展技を行うことができるようにする。 【知識及び技能】
- 技などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向け自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- 自主的に取り組むとともに、互いに助け・教え合おうとすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとするようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) グルーピングの工夫

本学習は、グループでの活動（学び合い）が主となる。そのため、グルーピングについては第1時に各自ができる技を確認し、各グループの技能差を平準化した男女混合のグループを作った。グルーピングの工夫を行うことにより、各グループの学び合いが活発になった。特に、男女混合としたことで、難易度の高い発展技を男子が練習する場面において、女子が男子の動画を撮影したり、ポイントと比較したりする場面が増えた。技能の高い生徒がよい手本となり、生徒一人ひとりの学習に対する意欲付けや、技に直接取り組まなくても、動きのポイントを理解する機会となった。跳び箱運動を苦手とする生徒の振り返りでは、「挑戦こそはできなかったが、技のポイントを学ぶことができた」という記述もあり、グルーピングの工夫は技能差に関係なく、生徒が動きのポイントを理解する上で有効であった。

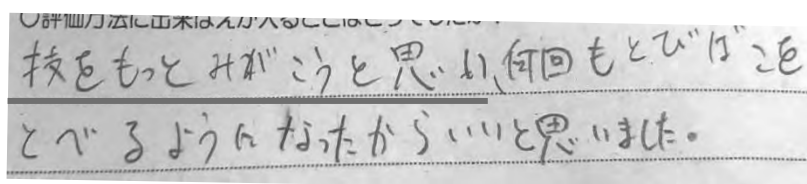


【学習後の女子生徒の感想】
男子の上手い人を見て、「こうやってやると、自分もうまくいくかも。」と思って挑戦しました。男子と女子で協力してアドバイスし合えたことがよかったです。

(2) 評価方法の工夫

単元のまとめとして発表会を行った。発表会の方法として実際の体操競技の採点方法を取り入れ、Dスコア（技の難度）とEスコア（技の出来ばえ）で評価し、グループの平均で順位を競う方法で行った。行う技については自己の能力に応じて基本的な技（開脚跳び・台上前転）、発展的な技（かかえこみ跳び・首はね跳び・頭はね跳び・前方倒立回転跳び）を選択できるようにした。

評価方法にEスコア（出来ばえ）を入れたことは、跳び箱運動が苦手な生徒の練習に対する意欲付けになった。基本的な技を選択しても出来ばえを高めることで、発展的な技と



同等の点数を取ることが可能になり、生徒は自己の能力に応じた技を選択し、出来ばえを高めようとタブレットを活用し自分の動きを確認する場面が増えた。

(3) 課題解決の工夫

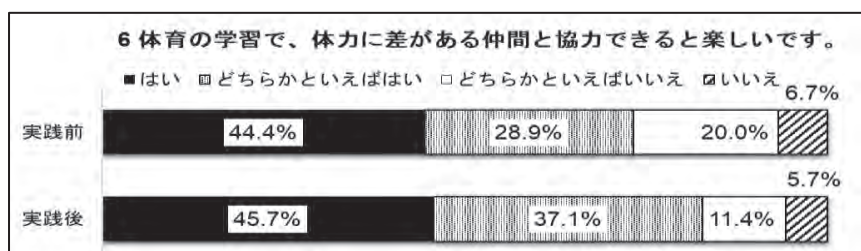
タブレット端末を活用し、自分が跳んでいる様子を同じグループの生徒に撮影してもらい、自己の課題を把握できるようにした。その際、技能差に関係なく生徒同士がポイントを学び合う場を設定した。ICT 機器を活用し、自分の動きを確認・フィードバックする活動は、生徒の学習意欲の向上につながる考えた。グループでの評価という点もあり、技能の高い生徒は自分の練習だけでなく、同じグループの生徒にポイントを教えるなどの主体的な活動が増えた。できなかった技ができるようになった場面ではグループ全員で歓声を上げ、拍手で成功者を讃えるなどグループで活動する喜びを感じている様子であった。



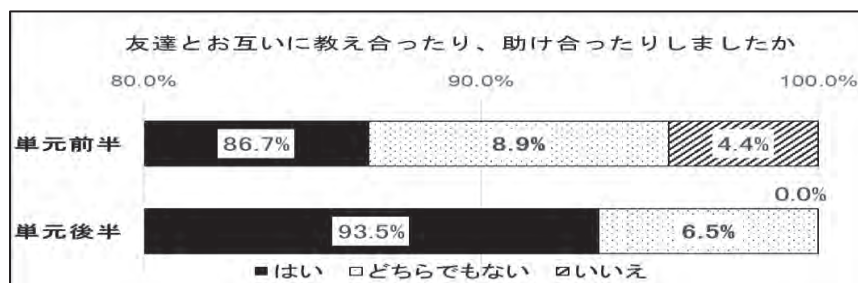
3 成果と課題

(1) 成果

○ グルーピングの工夫により、男女差・技能差に関係なく1つのグループとして活動する場面が増加した。「体育の学習に関する生徒アンケート」(21項目質問紙アンケート)において、「体育の学習で、体力に差がある仲間と協力できると楽しいです」と回答した生徒は学習後増加したことから、男女混合・能力混合のグルーピングは生徒の学び合いに効果があったと考える。



○ 授業の振り返りアンケートの結果、授業の回数を重ねるにつれて「友達とお互いに教え合ったり、助け合ったりしましたか」の項目について、「はい」と回答した生徒が増加し、単元後半では「いいえ」と回答した生徒は0人となった。このことから、評価方法の工夫や課題解決の工夫を行うことは生徒の教え合いや関わり合いに効果があると考えられる。

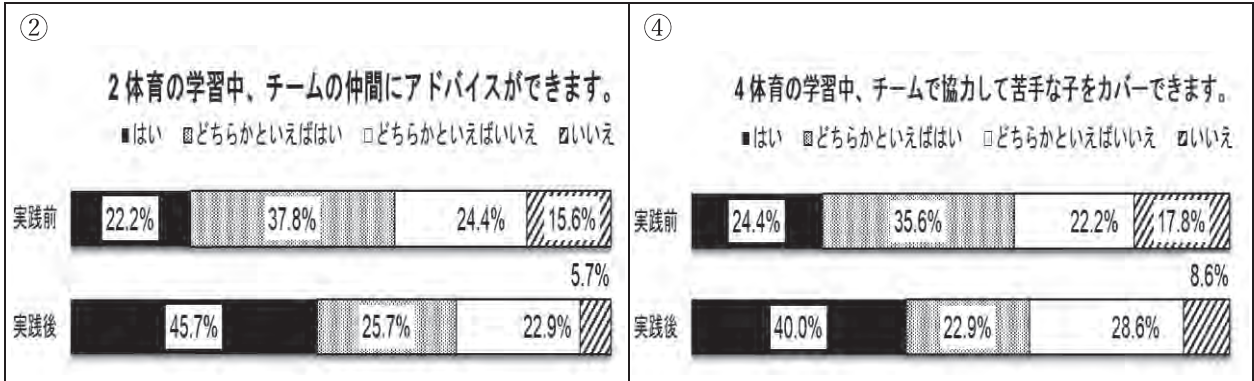


(2) 課題

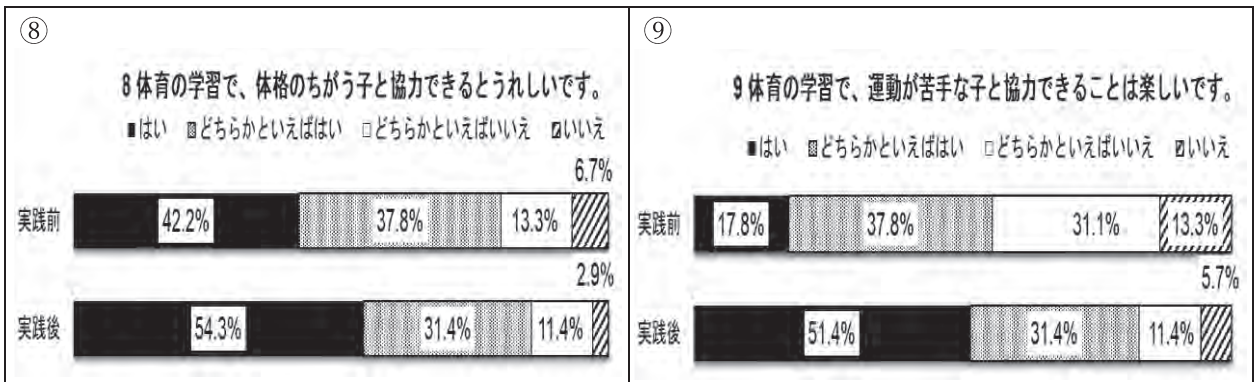
● 跳び箱運動は、自分で動いて動きを高めることから、効果的なグルーピングによる学び合いを自分の動きづくりに生かしやすい。今後は、集団で動きを高める球技等においても、男女差・技能差関係なく動きづくりに取り組むことができるようなグルーピングの在り方を考えていきたい。また、グループでの学び合いをさらによいものにするために、「どんな視点で考えるか」、「考えたことをどのように表現するか(言葉、図、映像等)」、さらに工夫していく必要がある。

【児童生徒の変容】

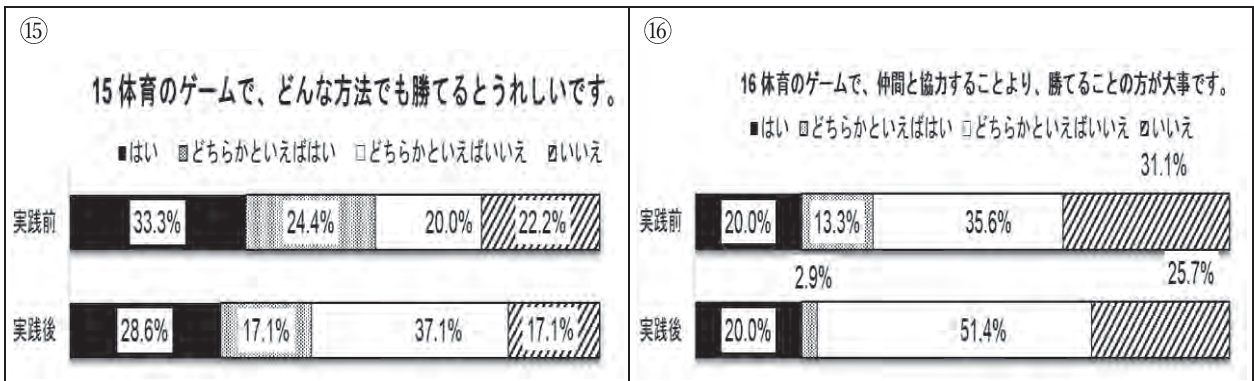
〔Ⅰ リーダーシップ〕



〔Ⅱ ちがいの受容〕



〔Ⅴ 過度な勝利志向〕



【授業実践協力者の声】

男女差に関わりなく、学び合いができるように実践に取り組みました。
実践を通して、特別な支援を要する生徒の運動に対する意欲が向上しました。



単元の目標

知識及び技能	運動観察の方法を理解するとともに、スピードに乗った助走から力強く踏み切って跳ぶことができるようになる。
思考力、判断力、表現力等	動きなどの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようになる。
学びに向かう力、人間性等	自主的に取り組むとともに、互いに助け合い教え合おうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとするようにする。

※共：単元全時間を男女共習

	1	2	3	4	5	6	7	評価規準
ねらい	競技の特性や技の名称について理解するとともに自己の目標を見つけていることができる。	公平性を考えたグループをつくり、基本技を習得するためのアドバイスを行うことができる。【助走】	基本技を習得するためにグループで協力し、協議学習（ジグソー活動）を行うことができる。【跳躍動作】	一人ひとりの違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとすることができる。				
導入	準備運動 (ストレッチの紹介)							
展開	○競技の特性や技の名称について理解できるように、映像等を使って説明する。4局面に分類 ○個に応じた目標記録を設定する。 ①立ち幅跳びの記録を参考に数式に当てはめ、算出。 ②実際に跳躍し、算出した記録を調整する。 ③目標記録を決定する。	○グループ決め 基本 技能の差を考慮して、平均化したグループ 共：(2) 体力差や技能差を平均化した男女混合グループの工夫	【助走の練習】 課題：スピードに乗った助走をする ○グループ内でさらにペアを作り、助走距離を探る。 ○目安から助走したときの踏切板との差を観察させ、助走距離の調整アドバイスをする。 ○ピニールひもを腰に付け、スピードに乗った助走を意識・練習させる。 共：スピードをピニールひもで可視化させ、アドバイスを行いやすくする。	前時の振り返り活動（学習内容や技能のポイントを確認する）	【跳躍動作の練習】 課題：自分の役割を果たし、跳躍動作における合理的な体の動かし方を習得する。 《エキスパート活動》 A 踏切動作（目線・跳ぶ方法） B 空中動作（手の使い方・体の反り） C 着地動作（着地の形） の3つの局面でエキスパート活動を行う。 共：(3) 体力や技能差に関わらず課題解決に取り組む工夫	○記録会① ・一人2本 ・記録の良い方を点数とする。 共：(1) 個人的運動を集団化した教材の工夫 ・勝敗を冷静に受け止める。記録だけでなく、これまでの過程（グループでの教え合いやフォーム）に目を向けるように指導する。	○記録会② ・一人2本 ・記録の良い方を使って点数を付ける。 ・グループの合計得点を出し、評価する。 共：(1) 個人的運動を集団化した教材の工夫 ・勝敗を冷静に受け止める。記録だけでなく、これまでの過程（グループでの教え合いやフォーム）に目を向けるように指導する。	
閉	○今後の学習の見通しを持つことができるように、記録会の評価方法について説明し、跳躍動作などの出来映えも評価していくことを説明する。	【助走の練習】 課題：自分に適した助走の距離を見つける。 共：グループ内でさらにペアを作り、助走距離を探る。 ・踏切板から逆走し大まかな目安を見つめる。						
終末								
整理運動、振り返り（授業後のアンケート等）の記入								

知識・技能	①	②	③	②③
思・判・表		②		①
主		②	①	③

技能を平均化した男女混合グループによる評価方法・課題解決の工夫
 中学校第3学年 C 陸上競技 才 走り幅跳び

1 単元の目標

- 運動の観察方法を理解するとともに基本的な技を滑らかに安定して行い、発展技を行うことができるようにする。 【知識及び技能】
- 技などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向け自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- 自主的に取り組むとともに、互いに助け、教え合おうとすることや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとするようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 個人的運動を集団化した教材の工夫

本単元では、自他の記録の向上を目指して課題解決に取り組むために、グループごとに個人目標と記録の差を点数化し合計した点数を平均して競争するグループ対抗戦を単元の最後に位置付けた【資料1】【資料2】。単元の始めの段階にグループ対抗戦の行い方を確認すると、自分だけが記録を伸ばせばよいという考えから、グループのメンバーの記録を伸ばすことが必要という考えに変化し、練習中からグループ内でアドバイスをする場面が見られた。

3. チームで協力して高得点を目指そう!

メンバー: _____

◇記録会(得点表)◇

得点	10	9	8	7	6
目標との差	41cm以上	31~40cm	21~30cm	11~20cm	0~10cm
得点	5	4	3	2	1
目標との差	-1~10cm	-11~20cm	-21~30cm	-31~40cm	-41cm以下

単元の最後は記録会◎
 目標記録との差が点数になるよ!

【資料1 個人記録の得点表】

記録会 目標記録表

(4 班)

氏名	目標記録	実際	差	ポイント
●●	3m 69cm	3m 70cm	+1	6
●●	3m 10cm	3m 10cm	+0	6
●●	3m 55cm	3m 00cm	-55	2
●●	2m 69cm	2m 52cm	-17	4
●●	3m 50cm	3m 10cm	-40	2

【資料2 記録表】

(2) 体力差や技能差を平均化した男女混合グループの工夫

本学習は、グループでの活動(学び合い)が主となる。そのため、5月に行った新体力テストの立ち幅跳びの記録を参考にしながら、他の種目で実施した競技の様子や体力差などを考慮し、技能を平均化した男女混合のグループングを行った【資料3】。グループングの工夫を行うことにより、男女での活動はスムーズに行われ、跳躍動作のポイントを学ぶジグソー活動では、「調べる・まとめる・実践する」を協力して行うことができた。特に、対象学級には特別支援学級の生徒が2名(情緒1名、知的1名)在籍している。「調べる・まとめる」の部分では2名の生徒が活動しやすいように役割を分担したり、「実践する」の場面では、教師の指示や運動技能のポイントを理解しやすくするために、説明をかみ砕いて声をかけたりと工夫する様子が見られた。



(3) 体力や技能差に関わらず課題解決に取り組む工夫

生徒が体力や技能差に関係なく動きのポイントを見付け課題解決することができるために、ICT 機器を活用し知識構成型ジグソー法を用いて学び合う場を設定した。跳躍動作のポイントを学ぶ場面で

は、助走を合わせた後、跳躍に挑戦するも着地に失敗したり、踏切がうまくいかなかったり記録が伸びなかったため、記録を伸ばすための合理的な動きについて学習を行った。自分たちの失敗の経験があったため意欲的に調べ学習を行い、ジグソー活動ではエキスパート活動で調べた内容をグループ内に一生懸命に説明する様子も見られた【資料4】【資料5】。



【資料4 ジグソー活動の様子】



【資料5 仲間に説明する様子】

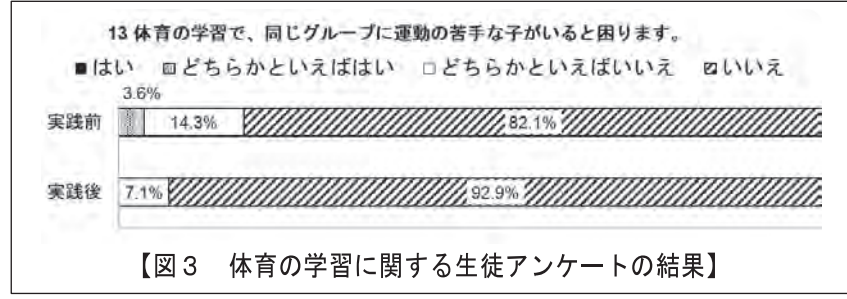
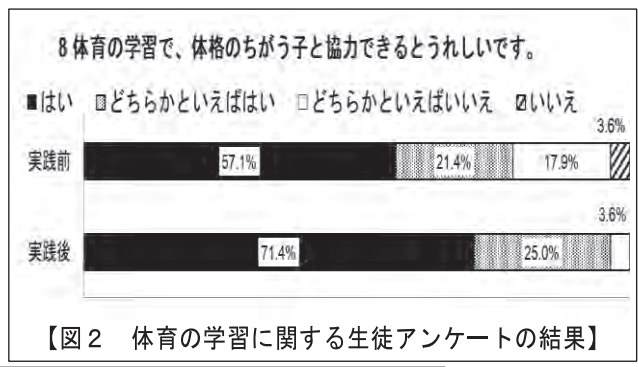
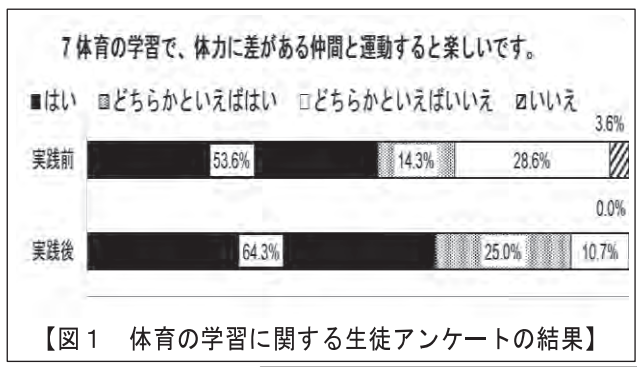
3 成果と課題

(1) 成果

対象学級では、体力や体格差が大きく、特別支援学級に在籍している生徒も一緒に学習を行っている。全ての生徒が、体力差や障がいの有無等にかかわらず、仲間と関わりながら運動の楽しさや喜びを味わってほしいと考え、教材化の工夫やグルーピングの工夫、課題解決の工夫の仕掛けを行い、実践に取り組んだ。

- 「体育の学習に関する生徒アンケート」において、「体育の学習で、体力に差がある仲間と運動すると楽しいです」「体育の学習で、体格のちがう子と協力できるとうれいす」という項目で、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒が増加した【図1】【図2】。また、「体育の学習で、同じグループに運動の苦手な子がいると困ります」という項目で、「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と回答した生徒が増加した【図3】。

これらのことから、グループごとに個人目標と記録の差を点数化し合計した点数を平均して競争するグループ対抗戦の教材化を行ったこと、体力差や技能などを平均化した男女混合のグルーピングを行い、グループの得点を伸ばすために、ICTを活用したり、ジグソー法を用いて学び合いの活動を設定したりしたことが有効であったと考える。

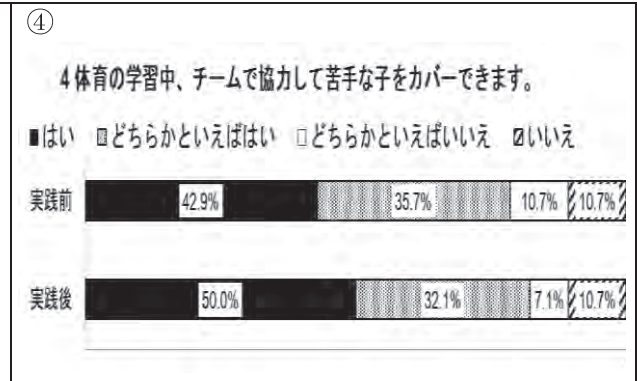
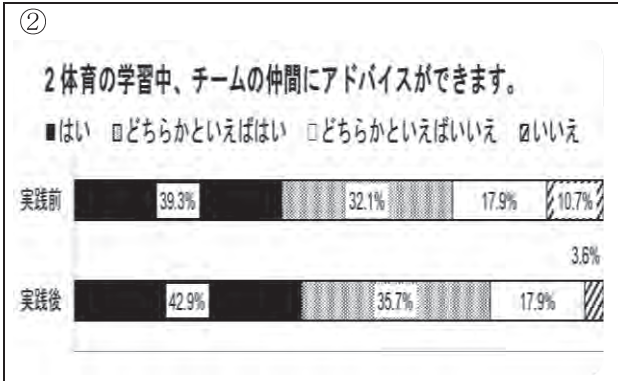


(2) 課題

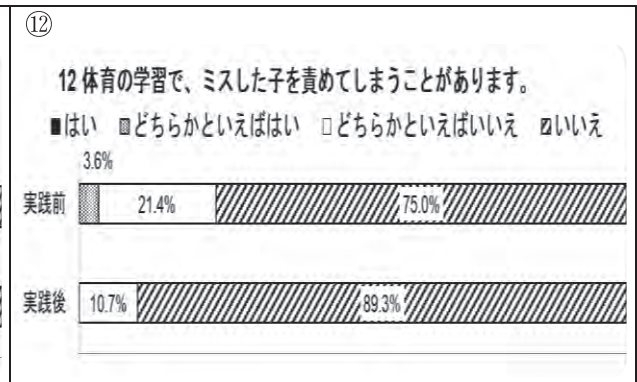
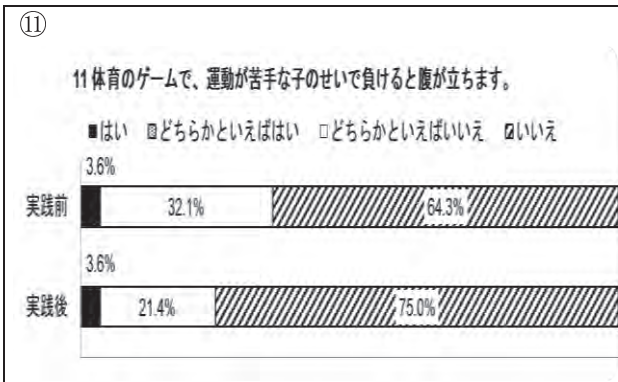
- 苦手な生徒に運動のイメージやコツを伝えることに苦戦する生徒が多く存在した。また、支援を要する生徒にどのように伝えるかを悩む生徒もいたため、運動を言葉で表す方法（オノマトペやアナログ等）を指導していく必要があると考える。
- 勝負にかかわらず、全員が楽しみながら技能を向上させることができるグループを、自分たちで考えることができる力を身に付けさせたい。

【児童生徒の変容】

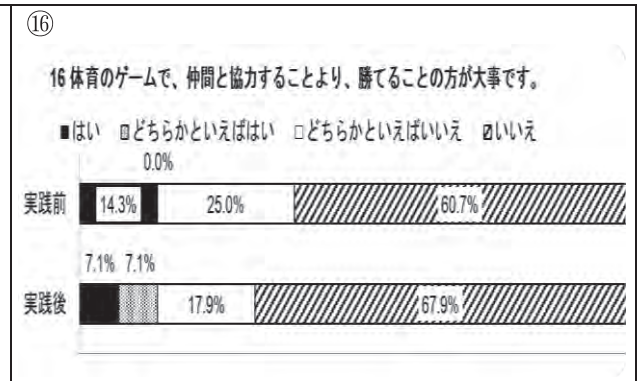
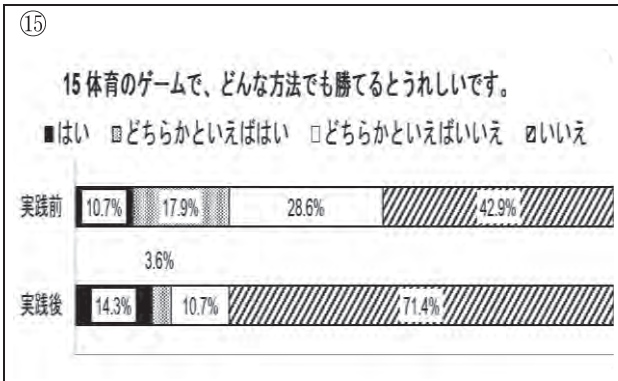
〔I リーダーシップ〕



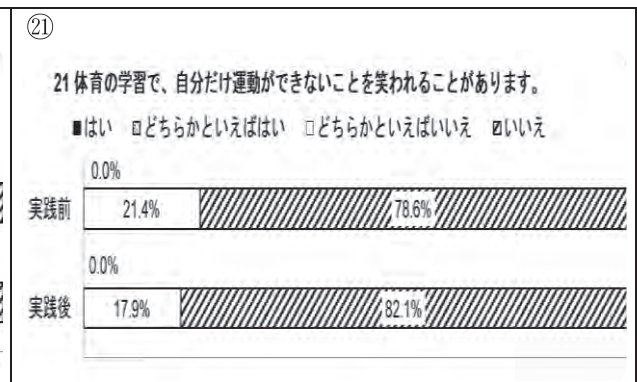
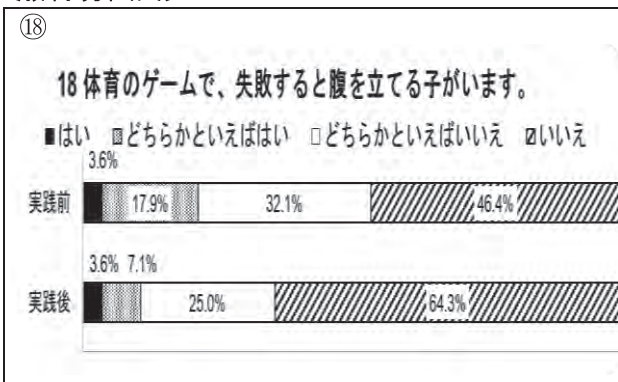
〔IV 失敗への排斥〕



〔V 過度な勝利志向〕



〔排除雰囲気〕



中学校第3学年 E 球技 ウ ベースボール型「ソフトボール」
単元目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻撃を展開することができるようにする。								
思考力、判断力、表現力等	攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えを伝えることができるようにする。								
学びに向かう力、人間性等	ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたブレイクなどを認めるようにすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。								

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	評価規準
ねらい	競技の特性や基本技能等について理解するとともに、自己の課題を見つけていることができる。									【知識・技能】 ①基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など動きのポイントを言ったり書いたりしている。 ②安定したバット操作と走塁、ボール操作と連携した守備で攻防ができる。
導入	準備運動、キャッチボールを行う。									【思考・判断・表現】 ①ボール操作及びボールを持たないときの動きにおいて、自己や仲間の課題を発見している。 ②それぞれの技能レベルに応じて、自分や仲間が全力でゲームを楽しむための方法を考え、それを仲間に分かっている。
展開	<p>競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解するとともに、ICT機器等を使って説明する。</p> <p>バット操作や守備の課題を見つけているために、試みのゲームを行う。</p> <p>1 チーム8～9名（男女混合）とする。 ブレイク時間を保障するため、時間制で行う。</p> <p>今後の学習の見通しをもつことができるように、バット操作や走塁、また守備の動きについての課題を話し合う。</p>									【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に積極的に取り組むようとしている。 ②一人ひとりの違いに応じたブレイクを認め、マナーを守ったり相手の健康を認めたりして、フェアなプレーを守ろうとしている。
終末	<p>動きのポイントを提示し、バットイング及び守備練習を行う。 ・ティールバットイング・スバットイング・シートノック</p> <p>共：（1）生徒一人ひとりの技能に応じて、それぞれが活躍できるチーム作りや用具・場の工夫 ・生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、金属及びプラスチック製のバット、通常及び柔らかいボール、ティールを準備し、生徒が選択できるようにする。 ・守備において、それぞれの技能レベルを考慮し、適材適所で守備位置につくことができるよう話し合いを行う。</p> <p>練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 共：（2）男女共習において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできる仕掛け ・生徒が練習の成果を実感できるように、条件付きのゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 ○条件⇒方法A～Cと道具A～ウを選択し、相手に宣言する。 方法A：通常のルール B：トスによる C：ティールの使用 道具A：金属バット・通常のボール イ：プラスチック製バット・柔らかいボール ウ：金属バット・柔らかいボール</p>									【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に積極的に取り組むようとしている。 ②一人ひとりの違いに応じたブレイクを認め、マナーを守ったり相手の健康を認めたりして、フェアなプレーを守ろうとしている。
整理運動、振り返り（授業後アンケート）の記入	整理運動、振り返り（授業後アンケート）の記入									

知識・技能	①	②	①②	②
思考・判断・表現	①	②	①②	②
主体的に学習に取り組む態度	①	②	①②	②

生徒一人一人の違いを認めて楽しむことができる場や条件の工夫
 中学校第3学年 E 球技 ウ ベースボール型「ソフトボール」

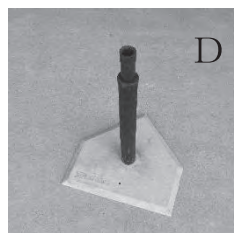
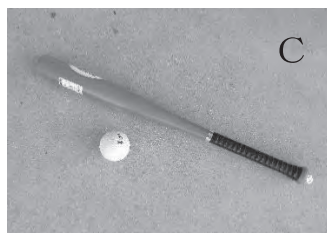
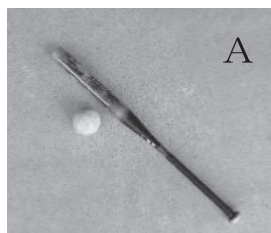
1 単元の見どころ

- 競技の特性や行い方、基本的なバット操作や走塁など攻撃の技能、ゴロやフライの捕球と送球、定位置での守備など、技能等について理解するとともに、安定したバット操作により出塁・進塁・得点し、仲間と連携した守備で攻防を展開することができるようにする。 【知識及び技能】
- 攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
- ソフトボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを認めようとする、健康・安全に気を配ることができるようにする。 【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) 生徒一人ひとりの技能に応じて、それぞれが活躍できるチーム作りや用具・場の工夫

- ①グルーピング：スキルテストや試しのゲームの結果をもとに、チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成した。
- ②用具や場：A：正式ルールの金属バット・ボール、B：ティーボール用のバット・ボール、C：プラスチック製のカラーバット・柔らかいゴムボール、を各チームに準備し、生徒一人ひとりが技能を發揮しやすい用具を選択できるようにした。また、バッティング時には、D：ティーの使用も可とし、バットにボールが当たる（ヒットを打つことができる）確率を高めた。



また、技能差にかかわらず、誰もが活躍できるように、E：様々な条件が記されたサイコロを準備した。サイコロは2種類あり、内容は以下の通りである。

- 攻撃時使用：逆敬遠、三振なし、ランナー進塁の3つ
- 守備時使用：敬遠、プラスチック製と柔らかいボール使用、2塁までの進塁制限、ティーボール用使用、二振でアウト、一振でアウトの6つ

サイコロは、ゲーム中に使用できる回数を制限し、チームで話し合っ使用することとした。

(2) 男女共習において「わかる・できる」楽しさを味わうことのできる仕掛け

練習において、バッティング練習では、野球経験者もしくはバッティングが得意な生徒がトスを上げたり、ポイント表を使ってフォームをアドバイスしたり、道具の選択に関してアドバイスしたりするようにした。ポイント表とチェックリストを準備し、正しく技能の動作を行うことができているか確認できるようにした。

守備練習においては、生徒個々の技能が發揮できるように守備位置を考えるよう促した。ボールがよく飛んでくる守備位置を守る生徒、打者の技能を考慮した守備位置の工夫など、適宜助言を行った。



【道具の選択に関してアドバイスをする姿】

ゲームにおいて、攻撃ではチャンス場面で、打席に入った生徒の道具の選択が適切かどうか、その時の状況を確認して発問し、生徒の思考を促した。守備については、打者が右打ちか左打ちか、選択

した道具が何かにより、守備位置を確認する時間を設け、チームの話し合い活動を大切にした。さらに、両チームともに、自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、2回表裏とそれ以降の様子を比較し、条件の工夫の効果を確かめる時間を設けた。

また、単元を進めていく中で、攻撃側のチャンス及び守備側のピンチの場面で、苦手意識のある生徒も楽しく取り組むことができるよう、サイコロを活用した(前項E)。サイコロを使うことで、苦手意識のある生徒も活躍しやすい状態をつくることができた。

(3) 生徒同士の学び合い、授業者と生徒の関わりの効果

生徒同士の学び合いでは、野球の得意な生徒が苦手な生徒に、男女関係なく積極的に教えたり励ましたりする姿が多く見られた。基本的技能について、チーム内で互いの経験やポイント表を基にアドバイスをして練習に取り組んでいた。また、ゲームにおいてはその都度打ち方やボールの投げ方、捕り方などについてアドバイスをし合ったり、失敗したら励まし合ったり成功したら称賛し合ったりすることができていた。その結果個人の基本技能や連携した守備の技能が向上した。



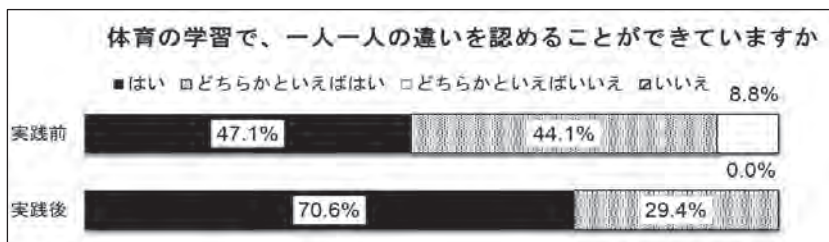
【お互いに声をかけ合って練習する姿】

授業者と生徒の関わりについては、生徒が道具の選択や守備位置の工夫について様々な考えをもつことができるように、適切に発問するよう心掛けた。これにより、生徒は「私は金属の方が打ちやすいと思う」、「ファーストに捕りやすいボールを投げるから安心して守備できるよ」など、自分の考えを積極的に伝えたり、お互いに意見を交換したりしてゲームを行うことができた。

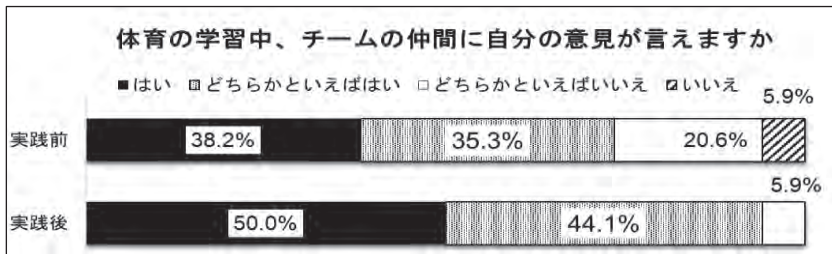
3 成果と課題

(1) 成果

- チームごとの技能の程度や男女の割合が均等になるようにチームを編成したことや、用具や場を工夫したことにより、生徒全員が意欲的にゲームを行うことができた。これにより、学習後に実施したアンケート(4件法)では、一人ひとりの違いを認めることができる生徒が増えた。



- 生徒同士の学び合いに対する適切な称賛や、生徒の「考えよう」「伝えよう」という意欲や意識を高める発問により、自分の意見をチーム内の生徒に積極的に伝えようとする生徒が増えた。



(2) 課題

- 生徒一人ひとりが違いを「認める」ことについて、今回は「チーム間の技能差をなくす」ことを仕掛けとして考えたが、今後は、「チーム間の技能差があっても、違いを『認める』」ことができるような授業づくりに取り組んでいきたい。そのためには、生徒が今以上に学び合うことができる場や用具、ルール工夫、特に、技能差があっても拮抗する場面が生じるゲームの在り方について教材研究に努めたい。

